

## 祝 辭

本塾柔道部に於て部史編纂の計畫起り、今や其稿成りて、愈々發刊を見るに至りたるは、誠に欣慶の至りである。義塾は夙に體育に重きを置き、柔道の如きも他に先んじて之を開始し、初期の幼稚舎に於て既に實行せられて居たのである。本塾柔道部としての起原は、明治二十年とのことであるが、それでも既に四十七年となる。予が始めて入塾したのは明治二十二年であり、三田に於ける予の生活も畧同年數を経て居り、一種の感慨に堪へぬ次第である。而して此の半世紀にも近き長き歲月を通じて、我が柔道部は健全なる發達を遂げ、義塾の體育上に大なる功績を擧げ、併せて塾風の培養及び鼓吹のため、大に貢獻する所があつた。予は歴代師範諸氏の勞を深く感謝すると同時に、部員諸君が常に一致協力して部の發達に努め、就中先輩諸氏が絶えず援助と獎勵とを與へて、倦む所を知らざるの風ありたるに對し、衷心より感佩の意を表せざるを得ない。

である。本史の記事は柔道部草創の頃よりして順次年を逐ふて最近に及び、頗る詳細を極めて居る。之を読む部員諸君は、部の變遷を探る以外に於て、更に多年來の部關係者の努力の跡に思ひを致し、今後に於ける柔道部の發展のため、一段の奮發を期せられんことを切に希望する。聊か所感を記して發刊の祝辭と爲す。

昭和八年二月

林

毅

陸

## 序 文

雄大なる我が建國の精神が、正しい國史の教育に依て涵養せられるものとするならば、小なりと雖も我が慶應義塾柔道部設立の精神も、亦正しい部史の存在を必須の條件として養成せられるものと謂はねばならぬ。

慶應義塾は昨昭和七年三月、正に創立七十五年に相當したので、盛大なる記念の式典を挙げ、畏くも秩父宮殿下の台臨を仰ぎ、御下賜金の恩典にさへ浴し、『氣品の泉源、智徳の模範』たる日本的紳士養成の根本道場として三田丘上に三色旗を掲げ、明治二十二年二月我國史に特筆すべき欽定憲法發布に先つこと一箇月、即ち同年一月に大學部が設置せられ、築地鐵砲洲を振出しとして、芝新錢座に第一回の更生を遂げ、三田移轉を第二回の更生とすれば、大學部の新設は内容上正に第三回の更生に當つてゐる。外、國家の上では明治聖帝の英斷で、立憲政治實行の基本として帝國憲法が發布になると云ふ

國民の向上國家興隆の潮時を看て取り、大學教育の尖端を切つた福澤先生の活眼も去ることながら、内、塾生の間にも勃々として押へ難い獨立自尊の意氣に燃へつゝあつたに相違ない。

右の如き内外の情勢に促がされて、自から呱呱の聲を揚げざるを得なくなつたのが、義塾體育會中最古の歴史を有する我が柔道部であつた。建部當初の精神は恐らく獨立自尊主義に據る塾風の中堅を以て自任した所に在つたと思はれるが、この貴むべき部魂は部運の成長發達と共に、年々歳々鮮明の度を増し、約十年の春秋を経て遂に確立不動の域に達したのである。

明治卅四年二月三日福澤先生の御他界に遇つた義塾は、事實乗るか反るかの大試練を経て、高等教育全盛の氣運を迎へ、擴張又擴張、遂に萬を以て數へる程の學徒を有するに至つた量的發展は、我邦私學の二大權威たるの一に耻ぢないのであるが、之を質的に觀て果して遺憾なしと斷言することが出来るであらうか。

最近の學生思想問題に對して、我塾從來の不關焉的態度を維持することが出来なく

なつたとすれば、恒に塾風再建の急先鋒を以て任じてゐた我柔道部の奮起すべきは、正に是の秋に在りと謂はねばならぬ。

既に在るべくして未だ無かつた我が柔道部史の編纂を企劃せられたことは何よりの歡びであつて、之を大成するには、元老先輩の記憶と共に有らん限りの史料を拾集し採録し置くことは、刻下の喫緊事であらねばならぬ。三田柔友會は大にこゝに鑑みる所があつて、適任者佐野甚之助君に之が編輯を依頼し、舊臘遂に脱稿四十又六年に亙る我部の消長と其底に流れてゐる部魂は、一目瞭然となることを得たのである。

嚮に福澤先生一百年の記念と共に本書の誕生を迎へたのは實に不思議の因縁であつて、不肖が其巻頭に序するの光榮を得たことを深謝し、三田柔友會の美舉と併せて人知れぬ佐野主任の苦心に對して永久の敬意を拂いたいと思ふ。

昭和八年癸酉二月三日福澤先生第三十三回忌辰

部長 柴田一能識す

## 序

曩に柔友會員集りし折、部史編修の計畫ありしが、偶、佐野甚之助君の印度より歸來久しく閑地にあるを幸とし、同君に依囑して柔道部史編纂を進むる事とせり。同君之を引承けてより約一ヶ年を經過したり。春秋の好季節は別とするも、三伏の暑熱や嚴冬素雪の折々、遠く人を尋ねたり、舊記を探し廻りたるの苦心は並々の事にあらざりしならんも、同君の不斷の努力は、遂に之を收めて立派なる部史を作り上げるに至りたり。其勞苦は眞に多とすべきなり。

講道館は日本傳來の柔術を陶冶して之を青年に應用し易き型を作りあげたるなれども、抑も柔術を學生體育の一助として之を實際に試みたるは、而も新しき智識の吸收に熱心なる最も進歩したる學生の其體育に、最も古き日本傳來の武術型を應用したるは、我慶應義塾を以て嚆矢とするは、顧みて甚だ愉快に堪へざる所なり。

義塾の先輩が柔術を體育に取入れたるは、野球やテニス等の野外遊技の未だ我邦に入らざる當時、必然思ひ浮ぶ考案にて稱賛する程にもあらざれど、柔術が身體の保強として、又身體各部の圓滿なる發達を遂ぐる上に、他に多く類を見ざる點よりして、而して又三田の柔道部が多數の剛健な身體の所有者を輩出したるより見て、古き先輩が柔道部の開設に、其維持に、又其獎勵に致せる盡力に對しては、衷心感謝の意を禁ずる能はざる所なり。

古き物には兎角微臭き節ありて、新しき青年學生には容れられざる傾きもあらんなれども、此古き物が四十年前當時の新らしき學生によりて、身心練磨の具として、相當の好果を收めたるに見るときは、古物必ずしも古物として捨つべきにあらず、否近來の如き世の青年學生が頭大身小脆弱なる病身に偏傾せる思想に捉はれて、中正なる判断を失ふ者多き時にありては、寧ろ此種の保健術が意外の効果を收めて、世道人心の險惡を中正に引戻す事あるべきを確信するものなり。

故福澤先生が體育を重ぜられたる言葉の中に、「獸身を造つて後に人心を容れよ」と

云へり。又西洋の諺に、「健全なる精神は強健なる身體に宿る」と云ふことあり。何れも實に千古の眞理なれども、此等の言葉の意味を誤らざらんこと最も必要なりと信ず。即ち何れも體育を重ずる言葉なれども、其目的とする所體育そのものにあらずして、實に人心又は健全なる精神の發達といふことを主眼とせるなり。換言すれば智育德育を完成する一の方法として、體育の貴ぶべきことを知るに足らん。されば體育の眞の目的は立派なる精神を作るにありと謂ふべし。

部史成り佐野君來りて余に序を求む。聊か所感を述べて之に答ふるものなり。

昭和八年六月下旬

白金の寓にて

金澤冬三郎

## 編纂を了りて

昭和七年三田柔友會の新年會に於て、部史編纂の件が決議せられた。此の空前の企てが、吉武同會委員長の盡力に依りて愈々實現性を有するに至り、同君から私に對つて部史編纂の任に當つて貰ひたいと話のあつたのは、目出度くも同年五月九日三田山上に催された我が慶應義塾七十五周年記念祝賀式に於てであつた。其の後尙一二回同君と會見してから、この夙に有る可くして未だ無かつた我が光輝ある柔道部の歴史を完成する上に於て、不肖自ら揣らずといふやうな譏りを免がれないかも知れないが、先づ私が其道を拓くこととなり、編纂に手を着けたのは六月に入つてからであつた。爾來俗務の傍ら、資料の蒐集や、先輩の訪問に、初めの二ヶ月を費やし、編纂の體裁結構を如何にすべきかに關して幾度か思案に暮れ首を捻つた末、後の四ヶ月を以つて漸く本書の編著を結了するに至つたのである。早く完結せよといふことであつたから、之れ以上の時日を費やすことが出来なかつた。

編纂の資料を何處に求めたかと言へば、講道館柔道が三田山上に始めて現はれた柔道俱樂部の草創時代より約十年間のことは、先輩の談話以外之を尋ねるに由もないのであるが、其後のことは、古い時代の三田評論と一時柔道部から發行されてゐた『部報』とから、最も多くの材料を得ることが出来た。古い時代の三田評論は、明治三十二年に發刊され四十一年の春迄續いてゐたが、之は當時塾生の手によつて編輯されたものであつて、其の編輯者の殆ど悉くが柔道部の錚々たる部員であつた關係から、同誌が三田の體育界を牛耳つてゐた我が部の記録に富んでゐるのは自然の勢ひである。道場には昔幹事時代に柴田一能君が『柔道部歴史』と表題を書き、内容は誰の筆であるか判らないが、毛筆を以つて丹念に書かれた寫本がある。之は全部ではないが三田評論の記事を轉寫したものである。又それより數年後の明治四十四年七月から大

正七年四月迄、號を重ねること十三回に及んでゐる『部報』は、即ち名の如く柔道部の機關雜誌であつて、これは無論徹頭徹尾柔道に關する文献と、部の年中行事の記事に依つて埋められてゐる。併し此等の雜誌には、缺本となつてゐるものもあり、それが何うしても手に入らなかつたのは残念であつた。それから最近に至つては（昭和三年以後）三田柔友會から出た時々の會報に、興味ある部の報告が少しは含まれてゐる。但し勝負試合の負け勝ちだけならば、これは道場に存する勝負帳に見ることが出来る。勝負帳は明治二十九年十二月幼稚舎生徒の勝負から筆を起したものであつて、爾來年々歳々行はれ來つた勝負若くは試合は、大小となく殆ど洩れなく之に掲げられてゐるが、最も部員の熱血を沸かしめたとも云ふべき遠征や對校試合等、年中行事以外のものにして之に逸してゐるものも尠なくない。其他二三の斷片的史料を得たのは、福翁自傳、福澤諭吉傳、慶應義塾五十年史と七十五年史、學報の創刊號と第二號、體育會雜誌及び時事新報等からであつた。

初め亡羊の歎あつた資料の詮索も、斯うして蒐めて見ると、たとひ斷片的なものであり、斷片的なものであるにしろ、思ひの外有つたと言はなければならぬ。其の材料の缺けたるものは、或は之を先輩の談に聽いてもよし、或は舊部員の手を煩はして寄稿を戴いたりして、兎にも角にも本史を編成したのであるが、まだ／＼大きな勝負や其他の事や、あつたことの幾つかゞ脱けてゐる。有つたことであつても、之を筆に現はす程誰の記憶にも判然してゐないものは、残念乍ら何うにも書きやうがなかつた。

蒐めた材料や記録は、其の敘する所に精粗あり繁簡あり、文體も亦一様ならず、隨つて本書に載する所、此處に百花燦亂たる花園を見るかと思へば、彼處には疎林を點綴せる原野ありといふが如き感なきにあらざる場合もあるであらうが、短時日の間に斯かる史録を編み上げるには、手取り早く材料を掻き集めて、之を年代順に整理し、出來るだけ之を選び分け、之を統一づける方法が最も捷徑なりと考へられたのであつた。記事材料の中筆者の分明せるものは、多く原文のまま

之を採録したが、又幾らか手を加へたものの中にはある。各自の筆に成つたものは、文體と言ひ句法と言ひ、皆當年の意氣を反映して、それ／＼に興味津々たるものがある。唯最も編者を困らしたものは、一應原稿を書き上げてから後に至つて次ぎ／＼に新事實が発見され、其の都度飛び立つばかりの喜びを胸に感じつゝも、再三再四原稿を書き改めなければならなかつたことと、記録に在る人名が幾通りにもなつてゐて、(例せば、太郎と次郎と三郎の混同位は有勝ちなことであるとしても、萩原か萩原か二様に書かれてゐたり、時には義男か義夫か芳男か由雄か幾通りにもなつてゐたりして、何れが本名か之を尋ぬるに大分無駄な骨折をしなければならなかつたことであつた。又年々の柔道大會は、明治三十一年の第七回より有る丈の記事を本書に網羅した積りであるが、その回数も年次通りになつてゐない。すなはち、明治三十四年の第十回となつてゐるかと思ふと、三十六年の第十一回で、三十九年の第十五回となつて居り、更に四十一年になる時、それが第十八回と記録に書いてある。或は年二回大會を催したこともあつたのであらうか、人に訊ねて見ても唯首を捻ねる丈けであるから、本史には姑く舊記のまゝにその回数を示して置くことにした。

『部史』は先輩の談話及び部の記録を骨子として編み上げたのであるが、私は之とは別に、それ／＼の特色に依つて彩られた各時代の全貌を窺ふに足る部史の別篇が欲しかつたのである。併し今の私としては、直ちにそれに筆を染める丈の餘裕を有してゐない。所が幸にも、資料蒐集の手段として、先輩や舊部員について懷舊談を聴き、又は寄稿を乞ひたるものの中には、之を時代順に纏むれば、略ぼ一篇の小史を成すに足るものも出て來たのである。本書に收めたる『柔道部十八景』と題するもの即ち是である。之を本書の前篇となしたる所以は、恰も本部史に對する概論の役目をする觀があるからである。前篇の『十八景』は寄稿者各自の頭から出た時代史であり、後篇の『部史』は記録から生れた年代史である。茲でちよつと上記以外本書の凡例となるべきものを述べて置かう。

一、柔道部十八景初めの八篇は、先輩及び舊師範の談話を筆記したものであるから、文責は勿論編者に在る。但し或事

柄の年代又は人々の段位等に就いて、各人の記憶に相違あるものは、敢へて之を訂正せず其の儘に掲げて置いた。此等は部史の方に正しいと思ふ所が書いてあるからである。

一、部史に於ては、重要な記録は一々之を載せたが、然らざるものは、掲げたるものあり、又略したるものがある。  
一、寒稽古大會及び對外試合は記録の存してゐるもの、全部を採録し、紅白勝負は其の中の重なるものを載せ、月次勝負や部員の他校派遣の如きは、舊時代に精しく新時代に及ぶに随つて粗になつてゐるのは部員の數、年と共に増加し、年々行はるゝ其の回数も非常に多くなつて居り、而して有段者の腕を揮つてゐるのは、多くは之にあらずして其他の勝負試合に現はれてゐるからである。

一、一年代に於ける重要な記事の配列は月日順となし、記事の短かきもの其他は雜記の中に纏めることにした。

一、本書は俗事多忙の間に編纂したものであり、且つ事實の精査に就いて、舊部員等と充分鳩首協議を重ねる餘裕もなかつたので、措辭行文の妥當ならざる點あるは無論のこと、或は脱漏錯誤の點なきを保し難い。それらは他日機會を見て増補修正したる原本を柔道部に備へて置きたいと思ふ。

本書の編纂に従事してゐる間に、最も私の胸を打つたものは、部の歴史も亦國家の歴史と其の揆を一にしてゐるといふことである。一國興廢の跡を跡ぬるに、國民の間に潑刺たる興國の精神が充實してゐる時に其國最も榮え、敵國外患なくして國民儉安に耽る時其の國亡びてゐるのは、古今東西歴史の通則である。國民的氣力の充溢と外敵の刺戟、此の二つのものが兩々相俟つて、一段又一段國家をして隆昌の氣運に向はしめる。我が柔道部の歴史に就ても亦同じく之が言へるのである。部の前身たる柔道俱樂部が呱呱の聲を揚げたのは、明治二十年であつた。時恰も二年後に於て、日本國としては憲法の大業を見んとし、塾としては大學部の設置を實現せんとする等、國に於ても三田山上に於ても、新興の氣漸く鬱勃たる時代であつた。斯かる時代に生れ、斯かる雰圍氣の間に育まれた柔道俱樂部なる孩兒は、徐々に成長して遂に柔道部

なる巨軀鐵腕の偉丈夫として現はる。其れより年を経て、時には都下學生の氣風滔々として懦弱に陥り、靡然として惡思想に感染し、其勢ひ遂に神聖なる三田山上を侵さんとしたこと一再ならずであつたが、塾祖によつて魂を吹込まれ、獨立自尊の大旗の擁護者を以つて任する此の偉丈夫にして一度び蹶起する時、此等の惡風濁流も忽ち其の影を潜めるのであつた。吾人は之を明治三十二年史に見るのである。之れ建部以來の傳統的精神が、部内に澎湃たるものがあつたからのことであつて、柔道部の興隆蓋しこの時から始まると思ふ。又創立以來約半世紀に垂んとする我が部としては、時に強敵を外に控へ、敗戦の苦杯を嘗めたこともあつたが、斯かる苦杯は實に一服の清涼劑であつて、之が爲め却つて部員の間に團結力を増し、心身鍛鍊の上に一段の緊張味を加へ、髀肉の嘆は發して泰山をも動かさんばかりの元氣ともなり、前の汚名を雪ぐのみに止まらずして、遂に天下亦敵なしといふ程の強豪をも生み出してゐる。明治三十五年遠征の初陣に於て三高に敗れ、その後却つて堅實味を加へたること、四十年對帝大天下分目の大合戦に利あらざりしが、之に奮起したる同志は、以後都下に強豪揃ひの名を壇にしたこと、大正五年京都大阪に敗戦の憂目を見てより、臥薪嘗膽、數年ならずして遂に關西を風靡したことなど其の例である。強敵を迎へては益々強味を加へ、外患に接しては愈々團結力を發揮するもの、之れ我部の特色である。此等を善用して青年學生の士氣を鼓舞作興するは、亦部としての一面の任務でなければならぬ。

最後に一言云はして貰ひたいのは、柔道部の傳統的精神に關してである。人々相寄り相集まつて、喜憂苦樂を共にし、協同の目的に向つて切磋琢磨する間に、其處に一種の和氣靄然たる美風と、崇高渾然たる精神の湧いて來るのは社會の原則である。國に在りて然り、家に在りて然り、而して柔道部の如き一大家庭を成せる健兒の團體に在りて最も然りである。この氣風と精神、之が核心となつて團體に活力を與へ、各時代の人々相傳へ、脈々として部員の血管に流る、其處に傳統的精神の美しさが存する。若し團體にして之を缺かぬか、恰も生命なき一個の形骸と何等異なる所ないのである。

福澤先生も、他に對して一國を結合せしむる要素として、傳統的精神の尊ぶべきを説かれてゐる。曰く『就中有力なる

は、懐舊の口碑を共にして其喜憂榮辱を共にするもの即ち是なり」と、又學事改良の要領の中にも塾風の重んずべきことに言及して、『その卒業生は、學問に於て敢て他の學生に譲らざるのみか、十六年の苦學中には、一種の氣風を感受すべし』と言はれてゐる。國民の士氣及び三田山上塾風の涵養に關する此等の言は、移して以つて直に柔道部に當て嵌めることが出来ると思ふ。實に光輝ある塾風によりて柔道部の精神が成立してゐるばかりでなく、柔道部の興隆と共に、塾の精神が彌が上にも其の活潑なる生氣を加へ、其の旺盛なる氣魄を持つに至つたことは、本部史の明かに示してゐる所である。歴史の任務は、單に過去を過去として敍するに止まらず、過去を將來に生かすにありとせば、其活用は最も多く部員たる者の双肩に懸つてゐると思ふ。吾々は泉を汲んで源を忘るゝことなく、倍々斯道に勵精一番して、我が塾風と部魂とを顯揚しなければならぬ。其處に我が黨青年男子の使命がある。(昭和七年十二月二十日)

\*

\*

\*

本書の編纂は、前記の如く、昭和七年十二月を以て一旦結了したのであるが、その出版はのび／＼となり、之を割削に附したのは、漸く八年五月に入つてからである。併しその間史實の再檢討に力を盡すと共に、更に先輩より數篇の寄稿を得たる外、鎌田前塾長の筆に成れる柔道部の記を得て、之を本史中に掲ぐることに出来たのは、寧ろ仕合せであつた。又書名の題字は矢張り鎌田先生の書であり、装幀は編者の意匠であることを附記して置く。

終りに臨んで寄稿者各位に對し、又校正に助力を賜りたる柴田一能君其他の諸君に對し、茲に深く感謝の意を表す。

昭和八年八月二十五日

三田柔友會

編纂委員

佐野甚之助